沢山の人のかかわりの中で育つ

文:角張 慶子

そもそも子育てとは…

この子がここまで育つのに、どれだけの人が関わってきたのか…昨年末NHK大河ドラマの最終回を観ながらそんなことを考えました。主人公の養子であり井伊家の後継ぎである虎松（のちの井伊直政）のことです。ドラマの中で、とっても頼もしくカッコよく育った直政、彼が大きくなるまでに数えきれないくらい沢山の人に守られ、支えられ、育てられ…そんな様子がたっぷりと描かれていたドラマでした。

本来、人間の子育ては長い歴史をさかのぼってみると、このように沢山の人が子どもの育ちに関わる子育てが当たり前の光景でした。ところが、現代の子育てを見てみると、お母さんが一人で日々奮闘している様子を多く目にします。「イクメン」という言葉が作られ、夫婦で子育てをしていると「よく手伝ってくれるお父さんね」なんて言われる時代です（言う側は褒め言葉のつもりです、たぶん）。このように子育てはお母さんがするものである、ということが日本で当たり前のように言われる場面が多くなり、しばらく経ちました。

そんな中で、同時に「育児不安」「育児ストレス」などという言葉も生まれました。子どもとの関わりの中でイライラしたり自信がなくなったり…、でもそんな不安な気持ちを慰めてくれるのが子どもの仕草だったり寝顔だったり…、そんな矛盾した気持ちの間で日々揺れ動く子育て中のお母さんたちの姿が、様々な場面や研究から浮かび上がってきています。そう、人間の子育てとは感情の揺れ動く非常に大きなお仕事です。そして、子どもとしっかり関わることは“おとな”の大事な役割です。大きくて大事だからこそ、子育てとは、本来ひとりきりで抱えるにはなかなかヤッカイなものなのです。

沢山の人の手で子育てを

長年の「育児不安」の研究の中で、夫婦の間で子育てについてよく話をしたり、周りに多くの支えがあったりという人の方が、そういう機会や存在のない人に比べて、育児における不安・ストレスが低いということが明らかになっています。また、お父さんと子どもとのかかわりの多さは、父子の関係を良好にするということも明らかになっています。「お母さんだけ」ではない子育てが、子育てをする側にとっても良いということが言えるでしょう。

では、子育てをされる側…子どもにとってはどうでしょうか。子どもの育ちにとって大切なことは「応答性」だと言われています。おなかすいたよ、おむつ替えてよ、抱っこしてよ…などという赤ちゃんの感情や要求を受け止めて応えること。ねえ聞いて聞いて！あれなあに？転んだよ痛いのぉ～、などの子どもの声に耳を傾け、受け止めて応えること。これって、受け止める側に余裕がないと難しいですよね。不安・ストレスが高い状態では受け止めたくても受け止めきれない…などということになってしまいます。

また、子どもは、そのように受け止めてくれる人を安心・安全を与えてくれる存在（安全基地）として世界を広げていくと言われています。そんな「安全基地」はお母さん一人とは限りません。むしろ、子どもにとって様々な種類の安全基地が存在することは、安心して生活をし世界を広げていくために重要なことだと言われています。親以外の人が、親が気づかない子どものある一面を見つけてくれる…そんなことも子どもの可能性を大きく広げます。“愛着のネットワーク”の中で子どもは見守られ育つ、というイメージです。子どもの安全基地になるのは、親だけでなく、子どもと関わるおとなの大きな役割、ということですね。

人と人とのかかわりのなかで育つ

さて、冒頭に大河ドラマの話をしましたが、何を隠そう、子どもの頃社会科が大嫌いだった私です。それがなぜ、歴史ドラマなどを楽しんでいるのかというと、親に似ず歴史好きの息子の影響なのです。人はいくつになっても、人と人とのかかわりの中で育てられ変わるものですね。子どももおとなも、あなたも私も。

だから、あなたのためにも子どものためにも「沢山の人の手で子育て」をぜひ実践してみませんか。地域の子育て支援を利用する、同じように子育てをする人とおしゃべりをする、子どもの通う園の先生方とよくやり取りをする、近所の人と仲良くなる、家族内で話し合って協力し合う…あなたのできるどんな方法でもかまいません。あなたの味方は地域にもたくさんいます。きっとこのhug kumiのなかにも見つかるはずです。

角張 慶子（かくばり けいこ）
新潟県立大学 人間生活学部子ども学科　准教授
臨床心理士。
専門は発達心理学。親の発達・子育て支援を研究テーマとし、地域における発達支援や子育て支援に関する実践や講演等を行っている。小学生2児の母。